

辻純江 令和6年10月度特別作品

俳句を楽しむ 辻純江

昔、藤田湘子先生が「一日に十句作ろうと思う」と話されたことがあります。その時は驚きましたが、私なりに、日記をつけるように句を作るといふことかなど理解して、続けてきました。一人で吟行するのを楽しみながら、今日まで俳句を続けてきました。最近はやや年をとり、頭が錆びてきましたが、まだしばらく、楽しく俳句を作りたいと思います。

八ヶ岳夏山となる露天風呂

初茄子に利尻の塩を振りにつけり

気に入りのぐい呑みにして盆の月

黒雲の流るる玻璃戸台風圏

台風過すずめの声のする朝

天高し行きと帰りの道を変へ

地下鉄の四番出口秋の空

秋夕焼縄文人も畏れしか

流木の獅子の頭となり秋の海

夫と居て言葉の要らぬ夜長かな

《作品鑑賞》

井藤 希

時に歳時記が破れるほど長く俳句を詠まれてきた辻さんの作品は軽やかで読んでいてもまことに楽しい。目の前にその句の光景が素直に広がるのである。楽しく俳句を作るとはこういう事なのだろうと思える辻さんの夏から秋の句である。

初茄子に利尻の塩を振りにつけり

初物は嬉しいものだが初茄子はとりわけ楽しみなものである。「利尻の塩」が効いていて作者が料理を心から楽しんでる気分が伝わってくる。利尻の昆布塩だろうか。読んでいてだけで酒が進みそう。

台風過すずめの声のする朝

台風の荒々しい音が止んで明るくなってきた窓の外にすずめの鳴いているのが聞こえてきた。「すずめの声」がこの日の朝の静けさを際立たせるとともに、台風が去ってほっとした安堵感と、すがすがしい朝を迎えた喜びを感じさせてくれている。

天高し行きと帰りの道を変へ

爽気の中でいろいろな秋の景色を味わいたいという作者の気持ちの高まりが「行きと帰りの道を変へ」に表れている。外にいるだけで楽しくなる秋の一日の軽快な一句である。